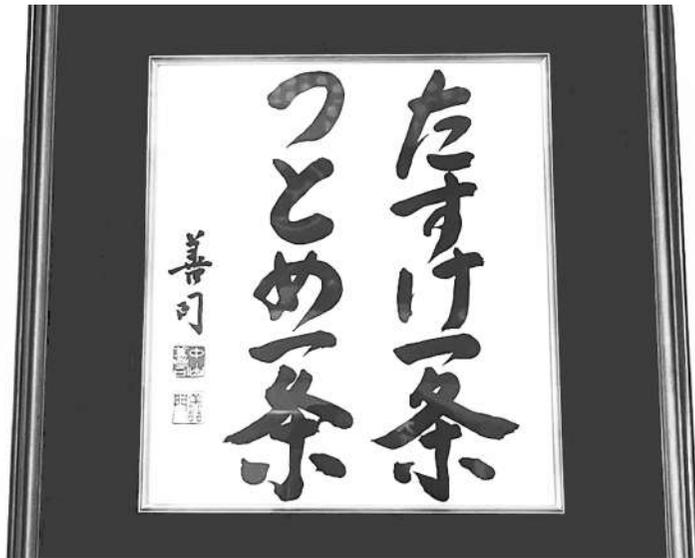


たすけ一条 つとめ一条に通ろう



教祖百四十年祭の教会への記念品



発行所
 天理教 芦津大教会
 〒546-0003
 大阪市東住吉区
 今川8丁目6番32号
 電話 06 (6702) 1980
 FAX 06 (6700) 1854
 Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
 印刷所 天理時報社

まことに、つとめとさづけとは、親神が、世界一れつに、陽気ぐらしをさせてやりた、い、との切なる親心によつて教えられた、たすけ一条の道である。

『天理教教典』第二章「たすけ一条の道」

親神様は、陽気ぐらしをさせたいとの思召から、教祖をやしるとしてこの世の表に現れられ、たすけ一条の道を教えられました。そして、よろづたすけの道として教えられたのがおつとめです。教祖のひながたは、おつとめ完成の道でもありました。

おつとめを教えてくださる際に、教祖は、「これは、理の歌や。理に合わせて踊るのやで。ただ踊るのではない、理を振るのや。」(『稿本天理教教祖伝』95頁)と仰せられました。理とは親神様の「一れつ子供をたすけたい」との思召であり、よろづたすけの御守護を頂戴する筋道でもあります。

教祖百四十年祭の教会への記念品は、真柱様のご揮毫の色紙で、「たすけ一条 つとめ一条」としたためてくださいました。私たちがおつとめを勤める際は、おつとめに込められたたすけ一条の心を我が心とするのと、つまり「親の思いに溶け込む」ことが大切です。

教祖百五十年祭、立教二百年という次の塚へと向かって進む門出の旬、一人ひとりが心のほこりを払い、誠真実に心を澄み切らせ、たすけ心をいっぱい湛えておつとめを勤めさせていただきます。



4年に一度のオリンピック。国民の期待と精神的なプレッシャーに押しつぶされそうになりながら、結果を出した後、「4年後に向かつて、また頑張ります」と、これまでの血のにじむような努力を忘れていくかのように話せるアスリートたちを、心から尊敬してやまない。

教祖の年祭は10年毎。その中の三年千日を頑張れば、親神様に十分受け取っていただける。結果として教祖にお喜びいただけるかどうかは、それぞれに託されている。

真柱様は年祭当日、3年前に戻ることなく成人の歩みを進めてほしい、とお言葉を下された。順位の付かない心の成人の階段を、どこまで登れたのか確認するには、神様との対話や、人のためにお供えする時間をどれほど取れているのかを顧みれば、自ずと見えてくることだろう。

これからも一れつ兄弟姉妹、陽気ぐらし世界を目指し、勇んで歩み続けたい。(木)

《立教189年 教会長年頭会議に於ける講話》

新しい人を信仰に導き

次の世代に信仰の喜びを伝えよう

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、今年の「教会長年頭会議」にご参集いただきまして、大変ご苦勞様です。また、教祖百四十年祭を目指して三年千日と仕切つて勤めてまいりました年祭活動の上には、ひとかたならぬご丹精を頂きましたことに、改めて御礼を申したいと思えます。誠にありがとうございます。

教祖百四十年祭当日は、神殿も教祖殿も回廊も人で溢れ、神苑もパイプ椅子に座り切れないほどの大勢の人が帰参されて、滞りなく勇んで執り行われました。各地から12万余の帰参者で親里が大いに賑わった祭典の日になりました。

おつとめに引き続いてご挨拶に立たれた真柱様は、年祭活動のおねぎらいとお礼を申された後、お

言葉の締めくくりに「今日は新たな歩み出しの日である。どうかこれからも勇んで歩み続けてくださることを願いたい」と、年祭は次への門出であり、弛みなく成人の歩みを進めさせていただけようと、全教に向けて呼び掛けられました。

次の成人の塚は、教祖百五十年祭とその翌年の立教二百年です。この2つが立て合う50年に1度の節目を10年後に迎えるのです。10年後に立て合うこの節目は、お道の転換期になるような気がします。また、そうならねばならないとも思うのです。

これから10年の取り組み

これから先10年をかけて、私た

ち在籍者、教会長が心掛けて取り組んでいかねばならないことは、一つは、新しい人を信仰に導くこと。外へ向けての積極的な働きかけ、にをいがけ・おたすけです。もう一つは、次の世代に信仰を伝えていくこと。内に向けての丹精育成、縦の伝道。この二つだと考えます。

お道の活動を考えれば当たり前のことですが、その当たり前のことを滞らせているのが現状ではないでしょうか。この年祭に台湾から真明彰化教会の洪克明会長が帰参しましたが、役員会議で「台湾では、今回の年祭活動は、10年前と比べて元気がなかった、勢いがありませんでした」と発言していました。これは海外だけに限ったことではなく、前回の年祭を教会長として勤めた方なら、誰もが感じていないことではないかと思えます。その理由として、コロナ禍の影響で長期間動きが取れなかったこともあるでしょうが、これは近視眼的な見方であつて、もつと長

いると思うのです。私は今回が会長として5回目の年祭でしたが、百年祭以降、10年を重ねるたびに、こうした傾向になっていることを実感しています。

外へ向けた働きかけ、活動が充実しているかどうかの指標の1つに、初席者の数が挙げられます。人の実績のピークは教祖八十年祭から百年祭頃までで、殊に八十年祭は「八方に広がる旬である」と全教が奮い立ち、「にをいがけだ、おたすけだ」と、外に向けての積極的な働きがなされました。その結果、年祭活動の期間中、多くの大教会で初席者が1千名を超えており、芦津大教会も三年千日で2千825人の御守護がありました。また八十年祭の2年後、昭和43年には「5千名別席団参」を打ち出し、別席期間と定めた1週間で約8千人が別席を運び、その内の2千747人が初席を運ぶという驚異的な御守護を頂きました。この年の初席者数は4千367人に上つたのですが、この勢いはその後もしばらく続きます。私が修養科に入っ



たのは百年祭の年祭活動1年目の4月からで、この年の修養科生は百名を超え、修養科棟は溢れかえっていました。毎年4月は同じような状況でした。

このように、当時は信仰していない教外の人々にをいを掛け、おたすけを実践する教会長や熱心なようぼくが大勢おられ、外に向かう気運が高かったのです。「この真実の教えを伝えずにはおれない」という雰囲気は教内にあり、私が会長に就任した頃は、各教会に熱心にをいがけをするようぼくが、1人や2人はいたものです。こうしてにをいがけ・おたすけが行き届けば、当然信仰する人は増

えていくわけですから、次はその人たちをいかにして育て、丹精していくのかという、内に向けた動きの充実が求められるのは自然の成り行きです。

百年祭以降は、極端に言えば、外へ向けた動きから、内に向けた丹精や育成に大きく舵を切ったわけです。ようぼく育成のための機会が増え、三日講習会など、多くの研修会がおちばで開催されるようになりましたし、「学生生徒修養会」が学生担当委員会に移行され、HARPなどの手法を用いて育成に力を入れ始めました。「こどもおちばがえり」も充実し、参加者は年々増加して、鼓笛隊活動など縦の伝道の手法も多岐にわたるようになりました。また教会長に対しての研修と育成を目的に、教会長おやさと研修会や大望塾なども開催するようになりました。

こうして内に向けた活動が充実して強化されましたが、その反面外に向かつての気運が落ちてきたことは否めません。熱心にをいがけをする人材が次第に減少して

きました。その結果、信仰の道に新たに入る人が極端に減っていました。

しかも、内に向かつての動き、つまり丹精や育成が十分になされていない現状も、よく考えなければなりません。ようぼくは年々老齢化して数が減る、新しい信仰者が増えない、少子化の傾向が続いている、だから育成や丹精の対象者が減っている。つまり、各教会は、今いるようぼくや信者だけを対象に動いている状況にあると思います。そこにコロナが追い打ちをかけたのが、百四十年祭であったように思うのです。

お道が目指すべきことは、外への積極的なをいがけ活動を推し進め、信仰する人が増えていく中に、丹精や育成の意識が高まって、その動きが充実していく、この循環が自然の流れになることだと思えます。たとえにをいがけで新しい信仰者が増えても、丹精が疎かであれば、ザルのようなもので、漏れ落ちる一方です。外への働きかけと内への丹精は、どちらか一

方に傾いてしまえば、バランスが崩れて、共倒れになる恐れがあります。現在のよう状況が続けば、各教会の、お道の将来が大いに案じられます。

親神様が「道は末代」と教えてくださっているのです。私たちに、たすけ一条の道を一生懸命に通って、その思いと実動を次に託していく大切な役目があるのです。今、道を通る私たちが真剣に考えなければならぬことは、私たちに後に続くくれる世代が安心して、そして勇んで信仰ができる筋道を付けることだと思えます。

そのためにも、これからの10年は、最初に申したように、外へ向けての積極的なをいがけを行って、新しい信仰者を増やしていくことと、内へ向けての丹精として、殊に次の世代に信仰の喜びを伝えていくこと、この2点を心がけて、取り組みが必要だと思います。外への働きかけについては、見知らぬ人々にをいを掛けるのは難しいかもしれません。しかし、家族や親戚、友人や知人など、何ら

かの繋がりのある人から道に繋がることが多いと思います。眞明芦津の道も、梅治郎初代様が商売人であったことから、最初は商人仲間道が伝わり広がっていきまし。このように、繋がりのある人には、案外道を伝えやすいと思います。殊に、そうした人が身上や事情になった時は、これは間違いなく親神様のお手引きですから、機を見ておたすけに駆け付ける姿勢は忘れてはならないと思います。そして、やはりにいがけの前提として、この人ならばと、人から慕われ頼ってもらえるような、なるほどの人になる努力が第一肝心です。

また、内への働き掛けにおいては、教会長やようぼくの子弟が信仰をするように心を尽くすことに力を入れなければと思います。そうなれば、自然と教会が活気づくのは間違いありません。これが縦の伝道の目的の一つです。

そのためにも、匂々に声を掛けることです。声を掛けなければ何も始まりません。この縦の伝道は、

すぐに結果が現れるものではないので、粘り強く丹精することです。そして、子弟たちに信仰の喜びを伝えるためには、まずは親が、また理の親が、信仰に喜びをもって日々道を歩むことを、お互いに肝に銘じたいものです。

親神様の思召は、どこまでも陽気ぐらし世界の実現です。このをやの思いにお応えできる、寄与できる教会に仕上げていくことが、在籍者、教会長の重要な役割です。陽気ぐらしを目指す夫々の教会の将来、そしてお道の将来のためにも、まずはこれから10年を掛けて、未信仰の方へのにいがけと、教会長、ようぼく子弟の丹精に、地に足を着けて、着実に、そして懸命に努力をしていきたいのです。皆さん方一人ひとりが、一つひとつの教会が心掛けて、積極的に取り組んでいただきたいと思えます。

つとめとさづけ

教祖は子供の成人を促される親心から、現身を隠されましたが、具体的に申すと、皆がおつとめを

勤めるためです。教祖のお姿がある限り、おつとめを勤めることを躊躇ちゅうちよしてしま。これでは陽気ぐらしは実現しない。そこで、皆が安心しておつとめを勤めることができるようにと、定命を25年縮めてまでも、お姿を隠されたのです。これが教祖年祭の元一日です。

また、教祖年祭は、扉を開いて教祖が存命の理をもって世界たすけに踏み出された元一日でもあります。そして、広くおさづけの理を人々にお渡しくださるようになります。ようぼくが取り次ぐおさづけの上に、御存命の理のお働きを次々と現わされ、道は瞬く間に伸び広がったのです。

これを思案しますと、存命の教祖のお供をさせていたでいて、おさづけを取り次ぎ、おたすけに励むことが、扉を開かれた親神様の思召に違いありません。つとめとさづけをもってたすけ一条の道を進むという、教祖年祭の元一日に立ち返り、次への門出をさせていたできたい。今がその匂です。おつとめについては、

このつとめなにの事やとをもっている
せかいをさめてたすけばかりを
四号 93
とのよまむつかしくなるやまいでも
つとめ一ちよてみなたすかるで
十号 20
はやくと心ころをてしいかりと
つとめするならせかいをさまる
十四号 92
と、このつとめで世界を治めてや
ろう、たすけてやろう、と仰せ
ただいているのです。
私たちはなぜおつとめを勤める
のか。それは、おたすけのために
勤めるのです。これを決して忘れ
てはなりません。
眞明組の先人たちは、おつとめ
によって熱心におたすけに励まれ
ました。病人の家に鳴物を持ち込
み、その枕元で、朝三座、昼三座、
夜三座のおつとめを、身上がたす
かるまで何日も勤められたことは、
皆さんも存じのことだと思いま
す。当時は「眞明の踊り講」と謳
われ、眞明組の道はおてふりで伸
びていったのです。
ただ、おつとめでおたすけをし



たのは、何も眞明組だけではあり
ません。他の講社も、おつとめに
よるおたすけで御守護を挙げてい
たのです。つまり、おつとめはお
たすけのためにあるのです。おた
すけの道具、しかもたすけのもと
だてであり、根本です。このこと
を改めて心に刻んで、おたすけの
心で、おつとめの勤修に励ませて
頂きたいと思います。

病気を一本の木に例えれば、目
に見える木の本体が病の症状で、
医療はこの部分に対処をします。
熱があれば下げる、痛みがあれば
鎮める、悪い所があれば切除する、
というふうには、枝をはつり、幹を
切るわけです。これが修理肥であ
る医者薬の役割です。こうして症
状は収まったとしても、根が残つ
ていれば、木はまた生えてきます。

この根の部分に働きかけるのが、
お道のおたすけです。病の根、い
んねんの根を切っていたくのが、
おつとめでありおさづけであつて、
これを通して、人をたすける心に
入れ替えてもらうことが、お道の
おたすけです。

その中でもおさづけは、病人に
対して直接理を取り次ぐ尊いたす
けの営みで、ようばくにしかでき
ないおたすけです。

ここで勘違いしてはならないの
が、ようばくは、あくまでも理を
取り次ぐ立場です。教祖が存命の
理を以て根を切つてくださるので
す。ようばくは「この人に何とし
てでもたすかっていたきたい」

と、真剣に願う。その心の誠真実
をお受け取りいただくのです。お
たすけの心でおさづけを取り次げ
ば、あとは教祖がお働きくださる
のですから、自信を持つて堂々と
取り次げばよいのです。

教祖はつとめを教え、さづけを
渡されて、陽気ぐらしに向かうた
すけ一条の道を付けられました。
私たちは、教祖の可愛い子供たち
をたすけたいという親心を改めて
心に刻んで、「おつとめとおさづけ
でたすけていただくのだ、御守護
を頂戴するのだ」という確たる信
念を持ちたいのです。

教祖百四十年祭の教会への記念
品に、真柱様から色紙を下付して
いただきましたが、「たすけ一条
つとめ一条」とご揮毫をしてくだ
さいました。真柱様は教会長御招
宴のご挨拶で、「教会の活動という
ものは、これを疎かにしてしまつ
たら何にもならないという気持ち
で書いたものです」と、その思い
を披歴されました。

この道はたすけ一条の道です。
ようばくの先頭に立つて働く立場

のお互いは、教祖百五十年祭への
門出にあたって、たすけ一条の道
を、おたすけの心で歩ませていた
だくという心をしかと定めて、力
強く一步を踏み出させていただき
たいと存じます。

日々の理

私たちは一人ひとり、夫々の人
生を歩んでいますし、立場ある者
としてこの道を歩んでおり、これ
からも歩んでいきます。人生やこ
の道の道中を考えたとき、大切な
のはその基礎になる部分だと思ひ
ます。基礎が十分でなければ、建
物はぐらつきまますし、一方でしつ
かりとした基礎を打てば、しっか
りとした建物が建ちまます。

この基礎のことを、親神様は
「伏せ込み」と教えてくださいま
した。この伏せ込みをする行為を、
「徳積み」と言つたり、積極的な
表現として「理づくり」と言つた
りします。この徳積みや理づくり
は、人生や道の道中の基礎の部分
になりますから、実に大切な行い
だと言えます。

年祭活動1年目の夏、私は心臓の冠動脈が狭窄をしたところにカテーテルを通して、血管にステントを入れました。実はそれより15年前、人間ドックに行つて要検査となり、憩の家で再検査してもらいますと、血管が50パーセント塞がっていたのです。しかしお医者さんは、「心臓の調子はいいから大丈夫でしょう。様子を見ましょう」とおっしゃった。それで5年後に再度検査してもらうと、狭窄が70パーセントまで進んでいました。それでも「心臓の調子はものすごくいいから大丈夫です。様子を見ましょう」と言われました。ところがその先生が、海外の病院に研修に立たれて、10年間置いたままになっていました。

そして年祭活動1年目、親戚や同級生の大教会長など、私の周りに心筋梗塞で倒れる人が出てきたのです。私も心配になって、循環器の医師に、「もう1回検査してください」とお願いしました。血管の検査は造影剤を使い、腎臓などに負担がかかるので、検査をすべ

きかどうかという前段階の検査として、心臓の検査をするのです。その結果、「心電図を見ても、狭心症のデータはありません。心臓は抜群に動いています。無理に身体に負担をかけてまで検査する必要はありません」と言われたのですが、「それでも心配なので、やったださい」と無理にお願いして、検査してもらったのです。すると、血管が本当に詰まる寸前でした。大教会の月次祭、ご本部の月次祭を勤めて、その翌日に入院して処置をしました。それで今こうして元気になっています。

そのときに思ったのが、「年祭活動1年目、頑張れ、勇んでやれ」と親神様が叱咤激励してくださったとも思いましたし、また親々が一生涯通ってくれたお陰、そんなお徳も頂いているのだらうと思つていたのですが、ちやうどそのとき、目に留まったおさしづがありました。

危ない事、微かな理で救かるは日々の理という。

明治26年4月29日

たとえわずかな少しのことであっても、日々を理を積むことで、間一髪の御守護、危ないところをたすけてやるということです。

これを見て納得したのが、私が40歳のときに始まった大教会信者会館普請のことでした。当時世話人だった山本義和先生が、「自分の教会で大きな普請をするときは、『日々の理』をしつらいいと思う。もちろん月々にお供もしているやろうけど、それとは別に、日々の理をさせてもらつたらどうや」とおっしゃいました。

それで早速、日々の理を始めました。日々ですから毎日です。まとめてというわけにはいきませんが、毎日足を運ぶのが日々の理ですから、毎日それを準備するのはなかなか手間なことです。うっかりすることもあります。しかし、これが慣れて当たり前になると、「毎日が神様に繋がせていただいている」という実感が湧いてきます。

そして普請が出来上がって一区切りつけたのですが、「ここまで長い間やってきて、やめてしまふの

はもつたない」と思い、今も続けております。

このおさしづに触れたとき、「なるほど、これか」と思いました。20年以上続けてきた日々の理が、危ない所を間一髪でたすけていたのだと思ひます。

尽す理にして大難小難としてある。 明治24年1月

尽くした理で大難を小難に御守護くださったのだと思ひます。別段、大層なことをした訳ではありませんが、続けてきた日々の理、この理づくりによつて、運命を良い方向へと導いていただけた、と喜ばせていただいております。

私は大教会長になって今年11月で42年になります。これまでにいろいろなことがありますが、今日こうしてお与えいただく立場の勤めを恙なく通らせていただいております。教会長の役割は、おたすけと丹精です。失敗もしましたが、たくさんのお守護や喜びも見せていただきました。ありがたいことだと感じています。

理づくりは基礎づくり

年若くして会長に就任した頃は、無我夢中でやっていたように思いますが、結婚もし、子供もできました。「このままではいかん。何か成人させてもらおう」という気持ちになり、おちばでの伏せ込みしかなと思いましたが、そこで、前真柱様が真柱の頃ですが、ご面会上がって、「おちばに帰らせていただいた折には、真柱様のお宅の庭の草むしりと掃除のひのきしんをさせていただけませんか」とお願いしました。人目につかないところでのひのきしんができるわけで、おちばに帰った折には、真柱様のお宅にひのきしんに通わせてもらいました。妻とおちばへ帰ったとき

には一緒に行きまし、子供を連れて行ったこともあります。

また、おたすけに行くときは、お玄閔の庭に入って、「病の根を切っていたきたい、身しいんねんの根を抜いていただきたい」という思いで、たとえ5分だけでも、雑草を抜いてから行ったこともあ

りました。こうしたことが今、会長を務めている上で、大切な基礎の部分になっていると思います。

また現在、私は本部で保安室長を務めています、その前は布教部長でした。布教部長は全教の布教活動の旗振り役ですから、荷が重い御用です。天理教布教部の舞台に立つために、「基礎を打たなければ舞台には立てない」と思ってしまったのが、本部神殿のトイレ掃除です。しかし、これだけでは足りないと思ひ、布教部から帰るときは、小さな火ばさみとゴミ袋を持って、道路のゴミ拾ひのきしんをさせていただきました。6年間、布教部長をさせていただく上での大きな、大切な土台、基礎になったと、今は思っております。

こうした伏せ込み、理づくりは、道を通る上でも大切なことだと思ひます。一人ひとりの人生の基礎、良い運命に切り替える土台になるだけではなく、おたすけの上に御守護を頂くための理づくりにもなります。

の理がある。救け救からん事情ある。救けたい救ける理が無い。扶け合い、救ける理が無い、救ける理が無いという。

明治24年6月21日
と、たすける理が無ければたすけられないと教えられるように、おたすけをする上でも、理づくりが大切になるのです。

これは、おさづけを考えれば明らかかなことです。今は9度の別席順序を運んで願ひ出れば誰でもおさづけを戴けますが、この別席制度ができるまでは、教祖が直接渡され、お姿を隠されてからは、身の上や事情でお屋敷に引き寄せて、本席様が渡されました。こうしておさづけを戴いた方は、お道の上を心を使い、真実を尽くしてきた方々ばかりです。つまり、おさづけの理は、お道に真実を尽くされた人に、いわばご褒美として渡された。言い換えれば、理づくりのできていた人に渡されて、このおさづけはことごとく御守護を頂いたのです。

長らえ尽した理だけや。それで

十分効くで、効かずで。

明治23年9月27日
と論されているように、たすけ一条の上に親神様のお働きを頂くために、理づくりが欠かせないことがよく分かります。

私たちの大切な仕事は、おたすけと丹精です。おたすけの現場で右往左往することのないように、普段から理づくりを心掛けて、しっかりと実践させていただきたいと思ひます。

おつとめとおさづけと理づくり。これをたすけ一条の道の芯に据えて、次への一步を勇んで踏み出しましょう。10年後の教祖百五十年祭と翌年の立教二百年の節目の旬には、全教が、そして各々の教会が、親神様、教祖の大きな理を戴いて、今よりも進展した姿を見せたいだけよう、成人の歩みを着実に進めたいと存じます。

殊に今年は何十年祭の年です。から、どうか年祭の年に相応しい、たすけ一条の心勇んだご丹精をお願い致します。

《2月月次祭 神殿講話》

誠の行いを積み重ねて

おたすけの実践に取り組もう

役員 井筒文夫

現在は新たな成人の塚、教祖百五十年祭への成人の歩みのスタートのとき、門出のときであるとお聞かせいただきます。三年千日の年祭活動の歩みを土台として、そこから成人のスタートを切るということ。この新たな成人の歩み出しにあたって大教会長様より、この道の基本であるつとめとさづけを通した成人の歩み、そしてそこでしっかりと神様に御守護を頂戴できる理づくりを通した成人の歩みを仰せいただいています。

陽気ぐらしの元のいんねん

親神様は人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいと思召されて、この世と人間をお創りになられました。そして親神様は、

人間をお創めくださるにあたり、人間が陽気ぐらしがしやすいようにと、人をたすけたり人に心を尽くしたりして、人に感謝されると、必ず満足、喜びが湧いてくる、何とも豊かな心持ちになれる「陽気ぐらしの元のいんねん」を一人ひとりの心の根っこに与えてくださったのです。この尽くす、人に心を配るといことは、精神的に豊かな味わいを感じるだけではなく、肉体的にも大きな効能がある御守護があるのです。

ある有名な医師が、「笑うことが大切です。笑うとナチュラルキラー細胞といって、がん細胞でも食いつぶしていくような免疫力が上がるんだ」と言われ、さらに、「満足感や達成感を味わってください。

その中でも一番いい方法は、ボランティアをしてください」と言われました。満足感、達成感の中でも、人に尽くしたときに味わえる満足感、達成感、このときの免疫作用が一番高いと証明されているそうです。教祖の教えが証明されたと思えました。

人に尽くしたときは、やはり満足感や達成感を味わって豊かな心になり、喜びも湧きます。このときに一番人間の生命活動、免疫活動が上がるということは、そのときに神様が一番働いてくださるのだと思うのです。「人をたすけて我が身たすかる」というように、神様は私たち人間をお創りくださっているのです。

もう一つ陽気ぐらしを味わう、心豊かに暮らしていく大切な角目は、「恩を感じる、おかげを味わう」ことです。これが陽気ぐらしを通る上で大切なことで、いろいろなことにありがたいと喜んで毎日を通していくことに必ず繋がるのです。

この御恩を感じる、おかげを味

わうことは、尽くすということに密接な関係があると、私は思います。尽くすから尽くされてることに気が付く。人の支えをするから支えられてることに気が付くのです。親の恩を味わうから親孝行ができるのではないのでしょうか。尽くすという心と行い、これがおかげを味わう、恩を知ること繋がつていくのです。

尽くす喜び、人だすけ

世間でも、この教えの信仰はしていないが、お道の人らしい通り方をされてる方はたくさんおられます。

ある冬の寒い夕方に、仕事帰りの一人の女性が駅のホームで電車を待っていました。冷え込みの強い日で、一刻も早く家に帰って暖かい部屋でくつろぎたいなと願っていました。ふと足元を見ると小さな子供用の赤い手袋が片方だけ落ちてあった。その女性は拾い上げて周囲を見渡したけれど、持ち主らしき人が見当たらない。ふと向かいのホームに幼い女の子と母



親が見え、女の子は泣きそうな顔で片方の手だけその赤い手袋をし、もう片方の手は寒そうに握りしめていた。そういう姿がパッと目に入ったそうです。「あの子の物かな？」、そう思った瞬間に待ちわびていた電車が入ってきた。乗れば暖かい家にすぐに帰れる。少し躊躇されたそうですが、その女の子の悲しそうな顔が思い浮かんで、電車に乗らず、連絡通路を渡って反対側のホームに行き、息を切らしながら女の子に手袋を差し出した。「落ちていたよ」と渡すと、女の子がパッと満面の笑顔になって瞳が輝いたというのです。母親も驚き頭を下げて御礼を伝えられ

た。

女の子は両手に手袋をはめて嬉しそうに手を振って「お姉ちゃん、ありがとう」と女性に伝えられた。その日の帰り道に女性は何とも言えない喜びと幸せ、豊かさを感じながら、疲れていたけれど届けて良かったと、家へ向かったというのです。投稿記事だったのですが、最後に、「人に尽くすというのは自分の時間や手間を惜しまず誰かの小さな困りごとに気付くこと。そんなささやかな行動の積み重ねなのかもしれません」と書いてありました。

こうした尽くす喜びを感じながらの人だすけ、これはこの道の信仰者でなくてもできることです。誰でもその心があればできる人だすけです。現在、そのように通られている方はたくさんおられることでしょうか。

それではこの道の信仰者にしかできない、信仰者にだけ与えられた人に尽くす行為、人をたすける方法とは何か。これが私はつとめとさづけだと思っております。

つとめとさづけを通して

以前、四国に養子に行った弟が、突然身上になったことがありました。肺が痛く、息もできなくて、緊急で入院しました。医者からは、「何とか命だけは助かるように、最善を尽くします」と言われたそうです。ひよっとしたら危ないという身上だったので、私たちも本当に驚きました。

そこから私たちがしたことは、天理と四国ですから、毎日行けなかったのですが、母や私や妹、皆で交替でおさづけの取り次ぎに、

できる限り通いました。行けないときは、私はおちばにいたので、お願いづとめをさせていただけこうと、つとめとさづけに継らせていただいた。また弟の教会でも、毎日お願いづとめを勤め、交替でおさづけの取り次ぎに通ったということでした。弟のたすかりを願って真剣に祈りを捧げたのです。

本当にありがたい、不思議なことなのですが、医者が不思議がるほどの回復で、ひと月で退院させ

ていただきました。命だけとは言われたところを、本当に素晴らしき御守護を頂いて、大難を小難にしてくださったのです。

私たち家族、身内全てこの道の信仰者であったということ、皆がようぼくであったということが本当にありがたかったなと心から思いました。

私たちの身体は神様からのかりもので、そのかりものに見せられる身上というのは、心の成人のためにある節なのだという真理、天の理合いを聞かせていただいております。

また私たちは、教祖の名代としておさづけを毎日取り次がせていただけること、さらには身上平癒を願っておつとめを勤めることもできる。たすかつていく本当の手立てとしてのつとめとさづけに、私たちは信仰者だから出会わせていただいていた。

ようぼくであったからこそ、おさづけを取り次ぎ、おつとめを勤めさせていただけたということ、本当に私はありがたいと思いまし

た。この道のようにほくとしてお引き寄せいただいた喜びを、心から味わうことができたのです。

たすけ一条の喜びを感じて

おかきさげに、日々という常という、日々常に誠一つという。誠の心と言え、一寸には弱くように皆思うなれど、誠より堅き長きものは無い。誠一つが天の理。天の理なれば、直ぐと受け取る直ぐと返すが一つの理。よく聞き分け。と仰せくださいます。

まずは、日々常々与えてくださる身近な方に心を配り、尽くす行いを重ねて、信仰者である私たちが自らが尽くす幸せ、豊かさ、すなわち陽気ぐらしの喜びを感じながら通ることが大切です。誠の行いを積み重ねていくことが大切で、これこそが、私は一つの理づくりであると思います。

理づくりとは、おちば帰りをしておちばの理を戴く、おつくしをする、教会の月次祭を勤める、ひのきしんをするなど、教会の御用

を勤めることもありますが、それだけでは不十分だと思ふのです。自分の周囲に与えてくださる方々に、日々心を配り、尽くす行いを重ね、自分が陽気ぐらしの喜びを感じながら、周囲の心だすけをさせていただくこと。その誠の行いを積み重ねていくことも、大切な理づくりだと思ふのです。

教祖は「成程の人になれ」と仰せくださいました。おかきさげは、又一つ、一名一人の心に誠一つの理があれば、内々十分睦まじいという一つの理が治まるという。それ世界成程という、成程の者成程の人というは、常に誠一つの理で自由という。よく聞き取れ。

と続きます。信仰者らしい態度で通る中に、周りの方々からの信用や信頼を得ることが出来る。そうすることで、「ちよつと相談に乗ってもらえますか」「最近ここが調子が悪くてね」などと、必ずおたすけとなる対象を、神様がお与えくださるのです。そんなときこそ思い切つて、また自信を持つて、お

さづけの取り次ぎを申し出て、実行させていただきたい。

また、月次祭や朝夕のおつとめのときに、その方のたすかりを願ひ、さらには月次祭にお誘いすることも、御守護を頂く手立てとなるでしょう。

日々常々のあり方こそ、にをいがけ、おたすけ、丹精の入り口です。日々、周囲の方々を配り、尽くす行いを重ねて、陽気ぐらしの喜びを感じながら、足元に陽気ぐらしの種を蒔きましょう。与え

ていただくおたすけには、おさづけの取り次ぎとおつとめに願ひと祈りを込めて真剣に勤め、たすけ一条の喜びを感じながら、成人の歩みを共に進めてまいりましょう。

本年はつとめとさづけを元としたおたすけの実践、さらにはより神様にお働きのただけるよう日々理づくり、誠の行いを積み重ねておたすけに取り組み、御存命の教祖にお喜びいただき、ご安心いただきたいと存じます。

(要旨)

次代を創る、あらきとつりようへ。

Instagram
LINEグループ (会員のみに)
5/31(日) 青年会
青年会本部 宇恵道明 委員 来会
芦津分会総会
10時開始 ▶ おつとめ・式典

立教百八十九年 二月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長 井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、可愛い子供を余さずたすけ上げたいとの深い思召から、世界一れつを十全の御守護にお護り頂き、温かき親心を以てお育て下さいまして、陽気ぐらしへとお導き下さいます親心の程は、只々有難く勿体ない極みでございます。わけても、先月の二十六日は、世界各地から十二万余の道の子が親里に帰り集い、礼拝場はもとより広い神苑を埋め尽くした大勢の参拝者と共に、教祖百四十年祭を厳かに心勇んで勤めさせて頂きましたことは、誠に有り難き次第でございます。私共は教祖の年祭を一区切りとして、次の成人の塚に向けて踏み出す旬を迎えておりますが、その中にも今日の吉日は、おちばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今より役目にあずかる者一同、勇み心を揃えて、座りづとめ、陽気てをどりを勤めて、二月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、芦津に繋がる道の子達が今日を大切な一日と参き集い、日頃の御守護への御礼に併せて、たすけ心を尽くして一心にお纏りする真実の状をお受け取り下さいますして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ、教会長、ようぼくは、御恩報じの心で日々徳を積み、理づくりを心がけ、つとめ一条の精神でおさづけの取り次ぎに真心を尽くして、教祖がお付け下されたたすけ一条の道を、真剣に勇んで歩む心を定めて、次に向かうところの教祖百五十年祭への一歩を踏み出させて頂く決心でございます。何卒、温かき親心にお連れ通り頂きまして、教祖の年祭を一里塚として、目指すべき陽気ぐらし世界へ向かって、力強く進ませて頂きますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

二月月次祭 祭典役割

| 祭主 | 扨者 | 扨者 | 指図方 | 今川政治 | 献饌長 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 大教会長 | 山本義範 | 守田清一 | 黄者 | 中村俊和 | 岩切正教 |
| 座りづとめ | 前 | 後 | 村田光伸 | 岩切正教 | 岩切正教 |
| 大教会長 | 奥田正徳 | 奥田眞治 | 新居里実 | 奥田正儀 | 奥田正儀 |
| 湯川正圀 | 河端芳雄 | 望月慶太 | 岡本久昭 | 岡本久昭 | 岡本久昭 |
| 岩切正教 | 樋川泰士 | 龍本一太郎 | 花岡忠和 | 花岡忠和 | 花岡忠和 |
| 会長夫人 | 加世田陽子 | 木村理恵 | 新居里実 | 新居里実 | 新居里実 |
| 前会長夫人 | 樋川りよ子 | 石川石美 | 今川聖一 | 今川聖一 | 今川聖一 |
| 岡島きよの | 樋川文子 | 樋川正美 | 湯川正信 | 湯川正信 | 湯川正信 |
| 奥田正徳 | 吉田裕和 | 今川聖一 | 吉田裕樹 | 吉田裕樹 | 吉田裕樹 |
| 川畑澄博 | 浜田宣郎 | 樋川芳征 | 川畑正博 | 川畑正博 | 川畑正博 |
| 山田道弘 | 奥田正儀 | 望月慶太 | 望月慶太 | 望月慶太 | 望月慶太 |
| 加世田洋 | 樋川和隆 | 川畑正博 | 樋川和隆 | 樋川和隆 | 樋川和隆 |
| 瀧本眞二郎 | 瀧本庄司 | 宗我道明 | 宗我道明 | 宗我道明 | 宗我道明 |
| 井筒敏成 | 岩切正義 | 荒木志朗 | 荒木志朗 | 荒木志朗 | 荒木志朗 |
| 井筒文夫 | 葭内正浩 | 前田清和 | 前田清和 | 前田清和 | 前田清和 |
| 守田清一 | 瀧本道明 | 井上康広 | 井上康広 | 井上康広 | 井上康広 |
| 竹内義忠 | 松森誠太 | 大西直喜 | 大西直喜 | 大西直喜 | 大西直喜 |
| 瀧本基志枝 | 山田秀子 | 河合ふみ子 | 河合ふみ子 | 河合ふみ子 | 河合ふみ子 |
| 井筒ちぐさ | 岩切孝子 | 花岡由紀子 | 花岡由紀子 | 花岡由紀子 | 花岡由紀子 |
| 宗我邦代 | 松本さだえ | 浜田千代実 | 浜田千代実 | 浜田千代実 | 浜田千代実 |

立教189年 教会長年頭会議を開催

2月24日、教会長年頭会議を大教会で開催し、教会長132名、代理15名、大教会在籍者40名が出席。教祖百四十年祭の年、次の塚へ向かったの一手一つの活動を誓い合った。

午前10時、親神様、教祖、祖霊様を礼拝した後、大教会長の講話(2頁〜7頁に要旨)。「次の塚である十年後の教祖百五十年祭、その翌年の立教二百年に向かって、おつとめとさづけと理づくり、これをたすけ一条の道の真に据えて、次への一步を勇んで踏み出させていただきましょう」と奮起を促した。

続いて表彰。昨年、初席者、お

組みや開催行事などを説明し、大教会の外壁の撤去、設置を本年より行う旨を発表した。さづけの理拝戴者、修養科生、教人との面で著しく御守護を頂いた教会(別掲)に対し、大教会長から表彰状と記念品が贈られた。また、昨年の年祭活動の目標が、

その後、各部各会連絡。各部各会の責任者、担当者が今年への取り

立教189年 心定め

| | |
|----------|------|
| 初席 | 400名 |
| おさづけの理拝戴 | 200名 |
| 修養科修了 | 100名 |
| 教人 | 50名 |



人の面で大きな御守護を頂いた教会を表彰



午年生まれの教会長に干支の湯のみを贈呈

「一教会一名以上の修養科生の御守護を頂こう」だったことから、表彰教会とは別に、昨年修養科生を1名御守護いただいた教会を発表し、その丹精を労われた。

小休憩を挟んだ後、23班に分かれてねりあい。大教会長の講話を元に、布教と丹精、また10年先の教会の姿を見据えた活発な意見交換が行われた。

瀧本眞二郎役員の閉講挨拶の後、全員でよろづよ八首を総立ちで勤め、今後の勇躍を誓い合った。

直会では、教会名ビンゴや、婦人会の余興などで楽しいひと時を過ごした。

【表彰された教会】

初席

8名 真明彰化教会

5名 日方分教会

4名 鳥栖分教会

おさづけの理拝戴

6名 東大屋分教会

5名 大島分教会

3名 紀周分教会

3名 山城谷分教会

3名 鳥栖分教会

修養科生

2名 大島分教会

2名 芦明德分教会

2名 真明彰化教会

2名 上有明分教会

2名 荻田町分教会

2名 大屋仁分教会

教人

2名 芦明德分教会

立教188年 成果

| | |
|----------|------|
| 初席 | 100名 |
| おさづけの理拝戴 | 71名 |
| 修養科修了 | 34名 |
| 教人 | 9名 |

女子青年初例会

婦人会女子青年は、2月15日に詰所で初例会を開催、10名が参加した。

はじめに本部神殿で参拝。ゴミ拾いひのきしんをしながら詰所へ戻り、新しい委員の任命式。竹内淳子・婦人会委員より、一人ひとりに辞令が手渡された。

委員会の引き継ぎを行った後、

今年11月1日に本部で開催される「女子青年大会」に向け、新委員を中心に本年の活動について話し合った。その後の昼食では、全員で鍋とスイーツを楽しんだ。



新委員長に任命された岩切寿代さん(島原)は、「今年は3年に1度の女子青年大会が開催されます。1人でも多くの人にご参加いただけるよう尽力していきたいと思

います」と抱負を語った。また、教祖にお喜びいただける成人を目指して、お互い心を磨く努力を重ねていきたいと思

学生生徒修養会開催

「学生生徒修養会」は、3月4日

から8日まで「大学の部」が、10日から12日まで「高校卒業生コース」がそれぞれ親里で開催され、大勢の学生たちで賑わいを見せた。

大学の部には、全国各地の道に繋がる大学生、専門学校生約50名が参加。「ひのきしん」感謝を実践に「をテーマに、講話やミーティング、グループワークなどで教理を学び、ひのきしんの実践を通して、信仰を深めていった。

参加者からは「グループワークで『ひのきしん』や『勇む』ことについて、いろいろな人の意見を聞くことができた」これからは感謝の気持ちを忘れずにひのきしん



「大学の部」参加者

に取り組みたい」などの声がかれた。

続く高校卒業生コースは、この春、高校を卒業した学生約40名が参加。グループワークなど語り合うことを中心としたプログラムで自らの信仰を振り返った。

参加者からは「グループワークで過去のことを語り合い、『自分だけじゃなかったんだ』と分かっ嬉しかった」「高校の部の学修より短い期間だったけど、濃密な時間を過ごせた」「天理教の深さやすこさを分かりやすく教えていただき、天理教との距離が近くなったように思う」などの感想が聞かれた。

なお、芦津からの参加者と本部スタッフは次の通り。

【大学の部】

- 河合 大洋(直 轄)
- 八木理栄子(東大屋)
- 西本 崇之(尼 崎)

【高校卒業生コース】

- 石川道二郎(直 轄)
- 寺本すみれ(紀 内)
- 山下 保(芦山都)
- 畠山奈々葉(芦 玉)
- 菊池 孝二(和 鎮)
- 木村 春陽(芦明德)

【本部スタッフ】

- 井筒 敏成(直 轄)
- 井筒 春来(直 轄)
- 井筒たつえ(直 轄)
- 加世田奈津子(大 島)
- 山田 元喜(當 別)
- 木村 華恵(芦明德)



「高校卒業生コース」参加者

事情はこび

立教189年2月26日お許し
明慈分教会

任命

四代会長

森 敬治 47歳



平成8年おさづけの理拝戴、
9年徳島商業高校卒業、13
年修養科第720期修了、29年
布教の家徳島寮卒業後、大
教会青年を勤める。
現在、徳島教区夫婦布教寮
育成員、徳島北支部北分区
長。書道初段。
就任奉告祭 3月15日

教務部報

教養掛 (2月)

主任

河合 善洋

教養掛

望月 慶太・宗我 邦代
梶川りよ子

教会長資格検定合格

吉田 充人 (芦 東)

立教189年2月21日教会長資格
検定講習会第158回を修了し、
翌22日検定合格されました。

修養科第1014期修了

小角 次郎 (脇 町)
高瀬 紀子 (荻田町)
内藤こずゑ (荻田町)
立教189年2月27日

おさづけの理拝戴《1月》

上野明日香 (毛 見)

小村 真央 (吉野川)

石川 諒 (直 轄)

江崎千恵子 (鳥 栖)

日 檉 陽太 (鎮 名)

森 咲理 (芦 南)

神田たまゑ (芦 広)

別府やすみ (大崎原)

洪 善榮 (真明彰化)

竹内 寿美 (稗 島)

〔拝戴日順 10名〕

初席《1月》

〔4名〕 紀周

〔1名〕 直轄、脇西、白地、

今津原、稗島、芦南、

芦華、本明勇、

真明彰化

〔順序運びより 13名〕

計 報

和阪分教会三代会长夫人

(津和部属)

好光廣代さん



令和7年12月30日出直され
た。享年73歳。

告別式は令和8年1月4日、
北島久嗣・津阪分教会会長斎主
のもと、和阪分教会で執り行
われた。

昭和27年新潟県柏崎市生ま
れ。天理高校二部卒業、天理

教校専修科卒業後、専修科の
職員として勤務、女鳴物を担
当する。同46年おさづけの理
拝戴、同年教人登録、同50年
修養科第403期修了。

長年、身上を患いながらも
たんのうの心で通り、常に上
級・津阪分教会、津和分教会
に真実の限りを尽くされた。

少年会芦津団野外練成会
デイキャンプ
4月25日 (土)
 9:30 大教会出発 / 9:50 現地集合
 参加費 1000円 定員 50名
 対象 小学4年生～中学3年生まで
 教会へ参加申込書・同意書を配布しています
 問い合わせ先は、担当・瀧本一太郎まで

| 項 目 | 初 席 | の お さ づ け の 理 拝 戴 | 修 養 科 修 了 | 教 人 |
|--------------|-----|---|-----------------------|--------|
| 大 教 会 (1) | 1 | 1 | | |
| 東 津 野 川 (13) | | | | 2 |
| 吉 野 川 (29) | 2 | 1 | | |
| 島 原 (16) | | | | |
| 日 方 (15) | 1 | 1 | | |
| 稗 島 (7) | 1 | 1 | | |
| 本 津 (2) | | | | |
| 日 高 (2) | | | | |
| 始 良 (5) | | | | |
| 門 司 (6) | | 1 | 1 | 1 |
| 當 別 島 (26) | 1 | 3 | | 1 |
| 大 沖 繩 崎 (3) | | | | |
| 尼 崎 (2) | | | | |
| 四 ツ 山 (5) | | | | |
| 大 冠 (2) | | | | |
| 島 下 山 (1) | | | | |
| 天 保 山 (3) | | | | |
| 青 木 (1) | | | | |
| 芦 浪 (1) | | | | |
| 甲 邊 (1) | | | | |
| 芦 華 (1) | 1 | | | |
| 天 津 (1) | | | | |
| 入 江 (1) | | | | |
| 豊 野 (1) | | | | |
| 紀 周 (3) | 4 | | | |
| 勝 明 (1) | | | | |
| 神 の 島 (1) | | | | |
| 兵 庫 眞 洲 (1) | | | | |
| 芦 ノ 郷 (2) | | | | |
| 本 明 勇 (2) | 1 | | | |
| 明 道 (1) | | | | |
| 芦 東 (1) | | | | |
| 和 鎮 (3) | | 1 | | |
| 神 滝 本 徳 (1) | | | | |
| 芦 明 彰 化 (1) | | | | |
| 眞 明 彰 化 (2) | 1 | 1 | | |
| 本 氣 (2) | | | | |
| 芦 明 照 (1) | | | | |
| 眞 伯 (1) | | | | |
| 合 計 (209) | 13 | 10 | 1 | 4 |

月 例 統 計 (自令和8年1月1日) 至令和8年1月31日)